

日本教育方法学会

第50回記念大会プログラム

前日 10月10日(金)	14:00	大会校企画「世界の授業研究」(広島大学教育学部管理棟2階 第3・4会議室)
	17:00	理 事 会 受 付
	17:30	
	19:00	

第 一 日 10月11日(土)	8 : 30	受 付 開 始					
	9 : 15	課題研究Ⅰ キー・コンピテンシーと 学力を問い直す		課題研究Ⅱ 道徳教育のあり方と教育方法学の立場 ー道徳の特別教科化をめぐってー		課題研究Ⅲ 教育方法学の学問的固有性とは何か ー教育実践の研究方法論を問うー	
	11 : 15						
	11 : 20						
	12 : 10	総 会					
	13 : 00	休 憩					
		自由研究 1	自由研究 2	自由研究 3	自由研究 4	自由研究 5	自由研究 6
	15 : 40						
	15 : 50						
		公 開 国 際 シ ン ポ ジ ウ ム 教育方法学をデザインし直す ーLesson Study in Japan をめぐってー					
	18 : 20						
	18 : 30						
	20 : 00	会 員 懇 親 会					

第 二 日 10月12日(日)	8 : 30	受 付 開 始						
	9 : 00	自由研究 7	自由研究 8	自由研究 9	自由研究 10	自由研究 11	自由研究 12	自由研究 13
	12 : 10	休 憩						
	13 : 15	課題研究Ⅳ 教育のグローバル化に教育方法学はどのように対応するか		課題研究Ⅴ 学校間接続を問い直す		課題研究Ⅵ 教師教育における教育方法学研究的課題 ー(実践知)の解明と育成へのアプローチー		〔会員企画課題研究〕課題研究Ⅶ 教科教育における思考力育成としての論理と感性の役割
	15 : 15							
	15 : 30							
	17 : 00	ラウンド テーブル ①	ラウンド テーブル ②	ラウンド テーブル ③	ラウンド テーブル ④	ラウンド テーブル ⑤	ワーク ショップ ①	ワーク ショップ ②

2014年10月11日(土)・10月12日(日)

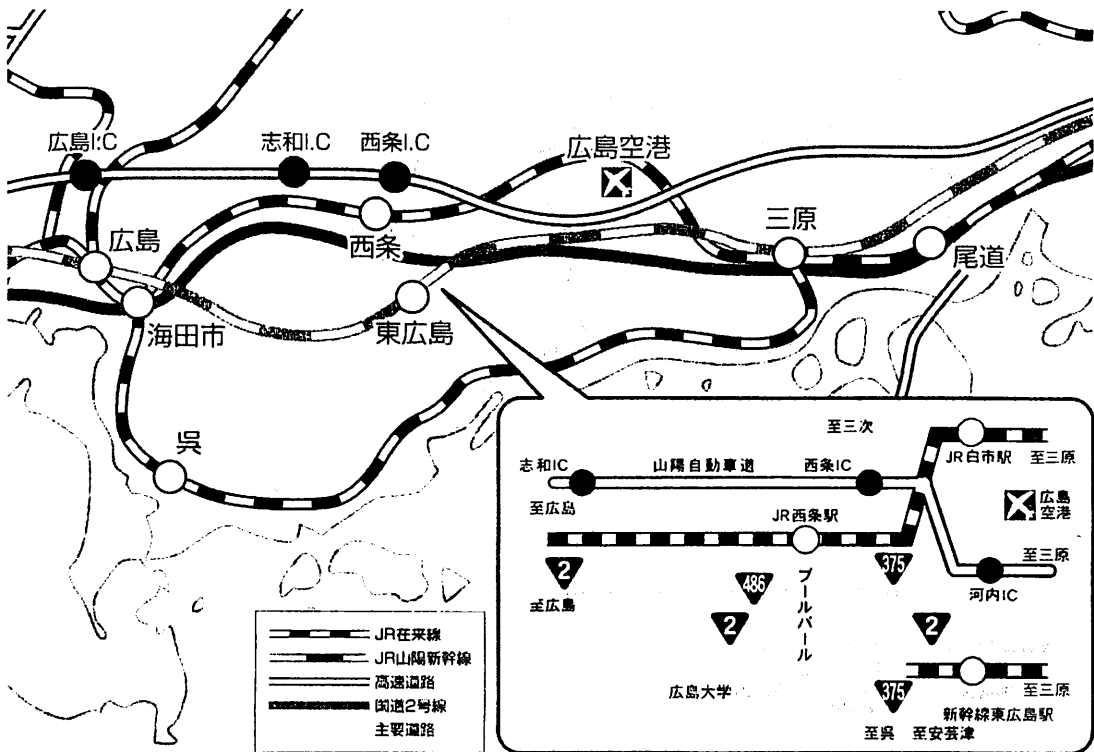
於 広島大学

大会参加要領

1. 会場案内：会場は、広島大学です。会場への経路につきましては、次頁をご参照ください。
2. 受付：両日ともに8：30からとなります。
受付は教育学部管理棟1階ロビーで行います。
 - ・大会参加費（『大会発表要旨』代を含む）は、一般会員4,000円、学生会員3,000円です。
 - ・当日会員（臨時会員）もこれに準じて受け付けております。
 - ・本年度までの学会費（一般会員8,000円、学生会員6,000円）を未納の方は、あわせてお納めください。
 - ・本年度の学会費を納入された方には、受付にて『教育方法43』をお渡しします。
 - ・会員懇親会の参加受付も行いますので、ふるってご参加ください。会費は4,000円となっております。詳しくは、14頁の「インフォメーション」をごらんください。
 - ・受付にてネームプレートを用意しておりますので、お名前をお書きのうえ、おつけください。
3. 昼食：土曜日は生協食堂が営業しております。日曜日は受付にて弁当の販売を行います。
4. 研究発表：発表会場につきましては、4・5頁の「会場配置図」をご覧ください。
 - ・自由研究の発表時間は、以下の通りです。
 - 個人研究：発表20分 質疑10分
 - 共同研究：発表30分 質疑10分

（但し、口頭発表者が1名の場合は、個人研究に準じます。）
 - ・自由研究における共同研究発表者の氏名にある○印は口頭発表者を表しています。

〈広島大学案内図〉



〈交通手段のご案内〉

※東広島・八本松駅からのバスは土日はほとんど運行されません
詳細は大学のHP等の時刻表をご参照ください

●JR 山陽本線をご利用の方

JR西条駅 (東広島市)	広島大学 行き	約20分 → 290円	広大中央口 下車	※タクシー 約15分、 約2,000円
JR八本松駅 (東広島市)	広島大学 行き	約20分 → 340円	広大中央口 下車	※タクシー 約15分、 約2,000円

●山陽新幹線をご利用の方

JR東広島駅 (東広島市)	広島大学 行き	約15分 → 380円	広大中央口 下車	※タクシー 約15分、 約2,000円
------------------	------------	-------------------	-------------	---------------------------

●広島空港をご利用の方

広島空港 (三原市)	JR白市駅 行き	約15分 → 390円	JR白市駅	約10分 → 200円	JR西条駅	広島大学 行き	約20分 → 290円	広大中央口 下車
---------------	-------------	-------------------	-------	-------------------	-------	------------	-------------------	-------------

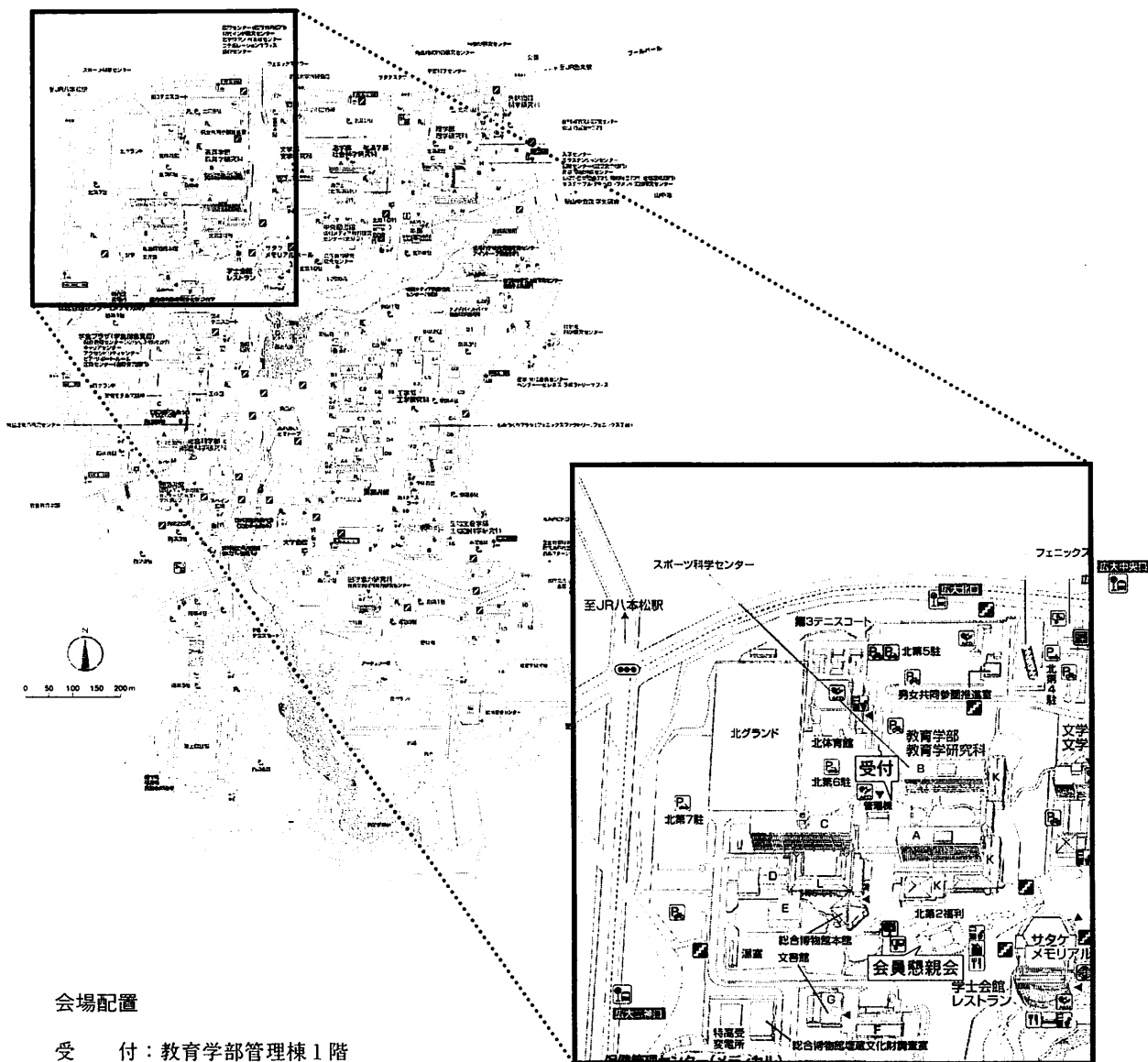
●高速バスをご利用の方 ※JR広島駅発着は便数が限られます

JR広島駅 (広島市)	高速バス 「グリーン フェニックス」	約75分 → 930円 (往復1,570円)	広大中央口 下車
広島バスセンター (広島市)		約60分 → 870円 (往復1,490円)	

※東広島駅には「こだま」しか停車いたしません

〈会場配置図〉

広島大学マップ



会場配置

受付：教育学部管理棟1階
 総会：教育学部L205講義室
 公開国際シンポジウム：教育学部L205講義室
 課題研究Ⅰ：教育学部L205講義室
 課題研究Ⅱ：教育学部L102講義室
 課題研究Ⅲ：教育学部L104講義室
 課題研究Ⅳ：教育学部L205講義室
 課題研究Ⅴ：教育学部L102講義室
 課題研究Ⅵ：教育学部L104講義室
 課題研究Ⅶ：教育学部L204講義室
 自由研究1・7：教育学部L102講義室
 自由研究2・8：教育学部L104講義室
 自由研究3・9：教育学部L107講義室
 自由研究4・10：教育学部L109講義室
 自由研究5・11：教育学部L202講義室
 自由研究6・12：教育学部L204講義室
 自由研究13：教育学部L206講義室

ラウンドテーブル①：教育学部L102講義室
 ラウンドテーブル②：教育学部L107講義室
 ラウンドテーブル③：教育学部L109講義室
 ラウンドテーブル④：教育学部L202講義室
 ラウンドテーブル⑤：教育学部L108講義室
 ワークショップ①：教育学部L204講義室
 ワークショップ②：教育学部L206講義室

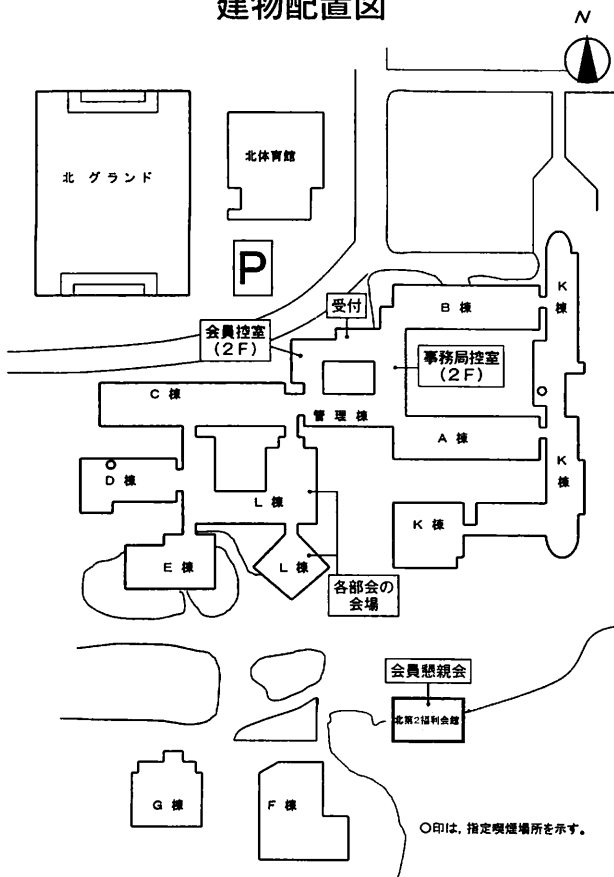
会員控室：教育学部管理棟2階 第3・4講義室

事務局：教育学部管理棟2階 第1会議室

※会員懇親会の会場は、北第2福利会館です。

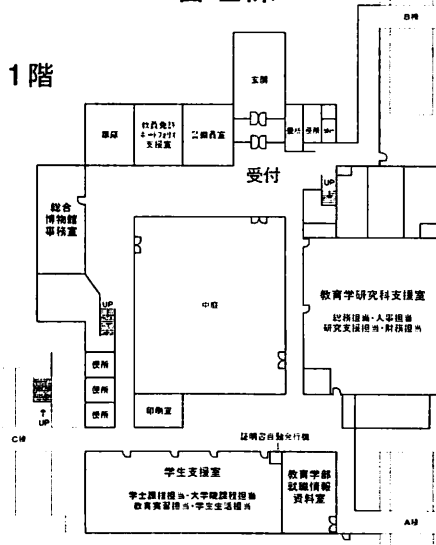
〈教室配置図〉

建物配置図

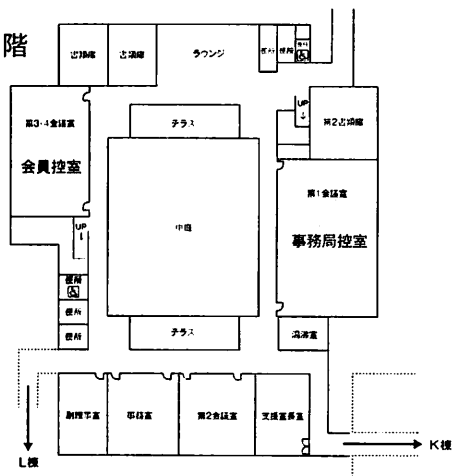


管理棟

1 階

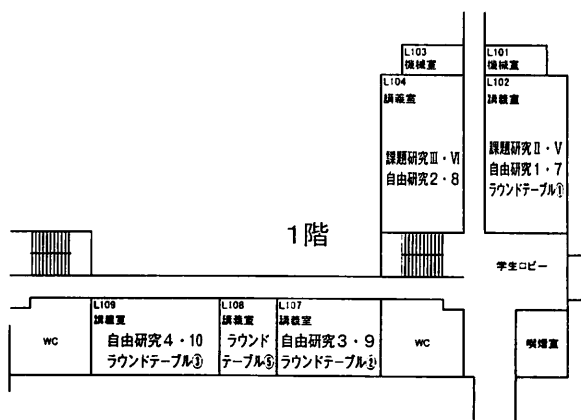


2 階

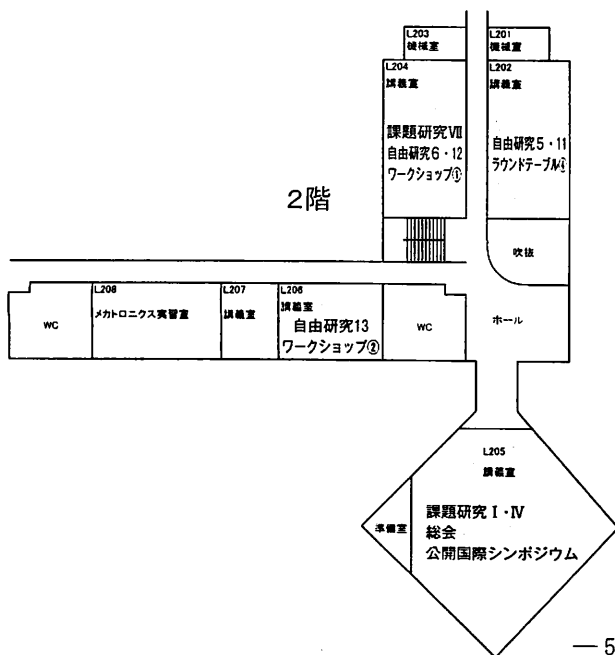


L 棟

1 階



2 階



10月10日(金) 14:00~17:00

大会校企画

「世界の授業研究」

(広島大学教育学部管理棟2階 第3・4会議室)

司会者

池 野 範 男 (広 島 大 学)

木 原 成一郎 (広 島 大 学)

提案者

小 山 正 孝 (広 島 大 学)

Catherine Lewis (Mills College, USA)

Edmund Lim (Principal of Huamin Primary School, Singapore)

〈設定趣旨〉

「世界の授業研究」がどのような背景のもとで、どのように展開されてきているのか、本企画は、大会一日目の「公開国際シンポジウム」のプレシンポジウムの企画として設定いたしました。小山氏、ルイス氏、リム氏からそれぞれ「授業研究」の実際の紹介をしていただき、それぞれの提案者の背景や問題意識、研究の取り組みなどを深めていける会にしたいと考えております。

本企画は、広島大学大学院教育学研究科「学習システム促進センター (Research Initiative for Developing Learning Systems: RIDLS)」の共催のもと、学会員の皆さまはもちろんのこと、同企画に関心のある方にもご出席いただける趣旨で企画しております。

当日の会では、授業研究の様子を具体的なVTRや写真、報告者の経験や各国の教育背景などを提案者よりご報告いただき、質疑応答の時間を設けたいと考えております。また、基本的には会場でのやりとりは日本語で行い、英語でのやりとりについては通訳がつくことになっております。

※事前の申込は不要です

共催 広島大学大学院教育学研究科「学習システム促進センター (RIDLS)」

課 題 研 究 I

キー・コンピテンシーと学力を問い直す

(教育学部L205講義室)

コーディネーター・司会者

梅 原 利 夫 (和 光 大 学)

大 野 栄 三 (北 海 道 大 学)

提案者

阿 部 昇 (秋 田 大 学) PISA「キー・コンピテンシー」の先進性と課題

ー日本の教育は「キー・コンピテンシー」をどうとらえたらいいのかー

小 寺 隆 幸 (京 都 橘 大 学) 数学的リテラシーを問い直す

ー数学的コンピテンシーを育むデンマークの教育に学びながらー

本 所 恵 (金 沢 大 学) 国を超えたキー・コンピテンシーの光と影

ーOECD と EU の経験よりー

〈設定趣旨〉

学力という用語については、日本の学校教育で長年の間使用され、その歴史的・社会的文脈の中で、一定の共通概念（及び概念装置）として理解が深められてきた。しかし近年、学力に代わって、キー・コンピテンシーという外来語が多用されてきている。コンピテンシーという用語がカタカナ語として使用される際に、はたして関係者の間でその含意が異同なく理解されているのだろうか。

本課題研究Iでは、以下の3つの小テーマを設定して考えたい。(1)「キー・コンピテンシーと学力の双方」についてそれぞれの中身を問い直す、(2)「キー・コンピテンシーと学力との相互の関係」を問い直す、(3)「キー・コンピテンシーと学力の測定可能部分（ないし測定困難部分）」を問い直す。

今回は、まず国語教育と算数・数学教育に関わる提案をもとに、キー・コンピテンシー概念と学力概念とを捉え直し、実践に寄与するための方途をめぐる討論の場としたい。

課 題 研 究 Ⅱ

道徳教育のあり方と教育方法学の立場

— 道徳の特別教科化をめぐる —

(教育学部L102講義室)

コーディネーター・司会者

井ノ口 淳 三 (追手門学院大学)

子 安 潤 (愛知教育大学)

提案者

山 崎 雄 介 (群馬大学) 「教科化」は道徳教育を改善するか

杉 浦 真 理 (立命館宇治高校) 道徳の教科化から

— シティズンシップ教育と法教育の可能性について考える —

河 原 尚 武 (近畿大学) 道徳教育における「教材」

〈設定趣旨〉

2013年12月に文科省の「道徳教育の充実に関する懇談会」は、道徳を「特別の教科」とする報告書をまとめた。それを受けて中教審で検討が始められ、早ければ2015年度から実施されることになる。

道徳教育の強化によっていじめを防ぐことができるのか、道徳を教科にすることになれば教科書の作成や成績評価をどのようにするのか、道徳を担当する教員をどう養成していくのか、早急に検討すべき課題は多い。

このような政策動向の分析や考察も欠かすわけにはいかないが、昨年の課題研究「子どものモラル・道徳の教育にどう取り組むか」を踏まえ、今年度は市民を育てる教育実践や、『心のノート』の改訂版とされる『わたしたちの道徳』および副読本の分析など、授業実践の方向性が見える内容としたい。

10月11日(土) 9 : 15～11 : 15

課 題 研 究 Ⅲ

教育方法学の学問的固有性とは何か

— 教育実践の研究方法論を問う —

(教育学部L104講義室)

コーディネーター・司会者

藤 原 幸 男 (琉球大学名誉教授)

田 上 哲 (九州大学)

提案者

豊 田 ひさき (中部大学) 教育実践を歴史的にアプローチする意義

鶴 田 清 司 (都留文科大学) 対話的共同体としての授業研究

— 解釈の有限性を超えて —

田 端 健 人 (宮城教育大学) 現象学的アプローチ

— 教室の〈空気〉と〈光〉を記述する試み —

〈設定趣旨〉

これまで4年連続して、教育方法学の学問的固有性を多角的に検討してきた。本年度は、教育実践の研究方法論を問うというテーマを立てた。本課題研究では、教育方法学の質的研究方法の中で、歴史的アプローチ、解釈学的アプローチ、現象学的アプローチを取り上げる。教育方法学においては、教育実践の研究方法を知るだけでなく、研究方法を駆使して教育実践研究を実践することが重要である。

本課題研究では、独自のアプローチを取って教育実践研究を実践されてきている実績のある研究者に登壇していただき、自らの研究実践を踏まえて各アプローチの手法と特質・意義について語っていただく。その上で、各アプローチの相互交流をととして、教育方法学における教育実践研究のあり方や課題について議論し、教育方法学の学問的固有性についての理解を深めていきたいと考えている。

10月11日(土) 13:00~15:40

自由研究 1

(教育学部 L102講義室)

司会者：桑 原 敏 典 (岡 山 大 学)
久 田 敏 彦 (大阪教育大学名誉教授)

- 13:00 ① グルーシュカ (A. Gruschka) の批判理論に基づく授業理論に関する一考察
— PISA 後の教育改革への教育学的応答—
松 田 充 (広島大学大学院)
- 13:30 ② 総合社会科にもとづく高等学校の授業における評価指標の開発
— 日本史自主教材「自動車の歴史」の実践による探索的研究—
堀 田 貴 之 (名古屋大学大学院)
- 14:00 ③ 学校での学習の意味 (Sinn) に関する一考察
— ドイツの陶冶履歴研究 (Bildungsgangforschung) を手がかりに—
樋 口 裕 介 (福岡教育大学)
- 14:30 ④ 小中一貫教育学校における教育実践とカリキュラム創造の試み
梅 原 利 夫 (和 光 大 学)
- 15:00 ⑤ 歴史意識の連続的形成を図る小中接続研究
— ドイツ歴史教科書の分析をもとに—
○宇都宮 明 子 (佐 賀 大 学)
○原 田 信 之 (名古屋市立大学)

自由研究 2

(教育学部 L104講義室)

司会者：秋 田 喜代美 (東 京 大 学)
阿 部 好 策 (広島都市学園大学)

- 13:00 ① 通常学級での認知処理様式を考慮した支援
— 授業の様相の解明と授業分析方法の検討—
松 尾 奈 美 (九州大学大学院)
- 13:30 ② 教師の感情に関する研究動向
○深 見 俊 崇 (島 根 大 学), 木 原 俊 行 (大阪教育大学)
小 柳 和喜雄 (奈良教育大学), 森 久 佳 (大阪市立大学)
島 田 希 (高 知 大 学), 廣 瀬 真 琴 (鹿児島大学)
宮 橋 小百合 (四国学院大学)
- 14:00 ③ 話し合いの授業にみる子どもの思考の深化に関する一考察
— 問題とその発展に着目して—
杉 本 憲 子 (茨 城 大 学)
- 14:30 ④ 授業の文化的スクリプトに関する国際比較研究
— 学習者の〈誤り〉に対する教師の対応を中心に—
サルカルアラニ モハメッドレザ (帝 京 大 学)
- 15:00 ⑤ ことばの力を見取る共通指標「日本語ステップ」の開発
— 群馬県伊勢崎市教育研究所日本語教育研究班の取り組み—
○小 池 亜 子 (国 士 館 大 学)
○古 川 敦 子 (共愛学園前橋国際大学)

10月11日(土) 13:00~15:40

自由研究3

(教育学部 L107講義室)

司会者：奥 平 康 照 (和 光 学 園)

折 出 健 二 (愛知教育大学名誉教授)

- 13:00 ① 教師と子どもによる授業ルールの協同構成
ープロセスの特徴と条件の検討ー
笹 屋 孝 允 (東京大学大学院)
- 13:30 ② 竹内常一の生活指導論における〈受容と対話〉
ー戦後生活指導研究の「転換期」を再考するー
後 藤 篤 (一橋大学大学院)
- 14:00 ③ 小学一年生の授業中の秩序維持と児童のフェイスへの配慮
ーポライトネス理論を視点とした一教師の事例の検討ー
川 島 哲 (東京大学大学院)
- 14:30 ④ 絵本「かないくん」をめぐる冒険
ーメント・モリ(死を想へ)ー
青 木 京 子 (昭和女子大学)
- 15:00 ⑤ 授業分析における記述データの全体構造の図示化に関する研究
○坂 本 篤 史 (星 城 大 学), ○須 田 昂 宏 (名古屋大学大学院)
○深 谷 久 美 (名古屋大学大学院), ○野 村 昂 平 (名古屋大学大学院)
中 道 豊 彦 (名古屋大学), 柴 田 好 章 (名古屋大学)

自由研究4

(教育学部 L109講義室)

司会者：権 藤 誠 剛 (島 根 大 学)

寺 岡 英 男 (福 井 大 学)

- 13:00 ① 教員の組織社会化に関する研究
○町 支 大 祐 (東京大学大学院), 脇 本 健 弘 (青山学院大学)
讃 井 康 智 (東京大学大学院), 中 原 淳 (東京大学)
- 13:30 ② 教師の経験学習とその促進要因
ー小学校教師を対象にー
○脇 本 健 弘 (青山学院大学), 町 支 大 祐 (東京大学大学院)
讃 井 康 智 (東京大学大学院), 中 原 淳 (東京大学)
- 14:00 ③ 韓国における小学校教師の社会科授業力向上に関するケーススタディ
ーソウル教育大学教育専門大学院初等社会科教育専攻を事例にー
○Jongsung KIM (広島大学大学院・研究生)
Hoyeop NAM (ソウル教育大学)
- 14:30 ④ 「外国人教育の基本方針(試案)」と京都市立陶化小学校の校内研究
ー1980年代初頭における在日コリアンを対象とした人権教育の特質ー
磯 田 三津子 (埼 玉 大 学)
- 15:00 ⑤ 授業における生徒の物語解釈の相対的関連構造の研究
ー中間項とデータ分析による感想の内容と相互評価の分析ー
中 道 豊 彦 (愛知県立知多翔洋高等学校)

10月11日(土) 13:00~15:40

自由研究5

(教育学部 L202講義室)

司会者：木原俊行(大阪教育大学)

佐久間亜紀(大東文化大学)

- 13:00 ① アクティブラーニングに向けた評価法の研究
ーディベートにおける動的評価の検討と課題ー
荒巻恵子(帝京大学)
- 13:30 ② イギリスのドラマ教育における「専門家のマント」の展開
渡辺貴裕(東京学芸大学)
- 14:00 ③ 21世紀型能力を育む、教員養成カリキュラムの検討
ー「教師」養成から「育師」養成へのパラダイムシフトー
佐々木 宏(首都大学東京)
- 14:30 ④ PBLの学び論Ⅰ
ーPBLの学びの意義の複眼的考察ー
広石英記(東京電機大学)
- 15:00 ⑤ ユビキタス映像記録視聴システムを活用した教職課程履修生の
授業実践能力育成支援の試みⅣ
○平山 勉(名城大学)
○後藤明史(名古屋大学)
竹内英人(名城大学)

自由研究6

(教育学部 L204講義室)

司会者：小川博久(東京学芸大学名誉教授)

湯浅恭正(大阪市立大学)

- 13:00 ① 小学校低学年児童に対する教師の感情的足場かけ
芦田祐佳(東京大学大学院)
- 13:30 ② 演劇教育におけるヴィゴツキーのごっこ遊び論の意義について
佐々木 徹雄(東北大学大学院)
- 14:00 ③ ドイツにおける幼児期のBildung課題の公式化をめぐる動向
中西 さやか(名古屋市立大学短期大学部)
- 14:30 ④ ドイツにおけるインクルーシブ教授学の理論的展開
吉田茂孝(大阪教育大学)
- 15:00 ⑤ ベルリンの全日制基礎学校に関する一考察(2)
ーFranz-Marc-Schuleの学校監査報告に着目してー
百々康治(志学館大学)

10月11日(土) 15:50~18:20

公開国際シンポジウム

教育方法学をデザインし直す — Lesson Study in Japan をめぐって —

(教育学部L205講義室)

コーディネーター

池野 範 男 (広島大学)
大野 栄 三 (北海道大学)
的場 正 美 (東海学園大学)
西岡 加名恵 (京都大学)

司会者

大野 栄 三 (北海道大学)
久野 弘 幸 (名古屋大学)

提案者

的場 正 美 (東海学園大学)

日本の授業研究は、今なにが問われているか

Rethinking the Dilemma of Lesson Study: Accountability and Professional Responsibility

Catherine Lewis (Professor, Mills College, Oakland, CA, USA)

Lesson Study in the United States: Implications for Japan?

アメリカにおける授業研究：日本への示唆

Edmund Lim (Principal of Huamin Primary School, Singapore)

Lesson Study & Its Growth: Points to consider for the journey ahead

授業研究とその発展：将来の旅路を考える上での要点

小山 正 孝 (広島大学)

日本における授業研究 — 数学教育の事例 —

Lesson Study on Primary School Mathematics Education in Japan

〈設定趣旨〉

明治時代からの伝統を有する日本の授業研究は、lesson studies として1990年代以降、世界各国に広がり、各国の文脈で多様な授業研究が展開されている。

そうした状況をふまえ、日本教育方法学会は『日本の授業研究（上・下）』を学文社より2009年に、それをもとにした英語版“Lesson Study in Japan”を溪水社より2011年に刊行した。それらの成果をもとに、本国際シンポジウムでは将来の授業研究と教育方法学を展望するために、世界で進展している授業研究の知見とこれまでの日本の研究蓄積を視野に入れながら、日本の授業研究の理論、理念、内容、方法、手法を多様な視点から捉えなおす。

的場氏は趣旨説明をし、小山氏は数学教育の授業研究を紹介する。日本の授業研究を他の国の経験からとらえ直すために、国際的に著名な2人の方をお招きした。アメリカにおいて lesson study を展開しているルイス氏は、アメリカの授業研究から日本の授業研究にとっての意味を問い直す。国家規模で授業研究を展開しているシンガポールのリム氏のタイトルの journey には終わりのない継続的な改革の意味を読み取ることができる。彼は、そのような授業研究の発展と将来を考える上での要点に焦点を当てる。

インフォメーション

●会員総会

日 時 : 第一日(10月11日(土)) 11:20~12:10

会 場 : 教育学部L205講義室

主な議題 : 会務報告

2013年度決算

2015年度予算案

次期大会校

昼食・休憩前ですが、ぜひとも多数ご参集ください。

●会員懇親会

日 時 : 第一日(10月11日(土)) 18:30~20:00

会 場 : 北第2福利会館

会 費 : 4,000円

会員相互の親睦をはかるため、懇親会を開きます。多数の会員のみなさまのご参加をお願いいたします。

●書籍販売について

学会事務局では、受付にて学会機関誌『教育方法』、研究紀要『教育方法学研究』、『大会発表要旨』の最新刊およびバックナンバーを、大会割引価格で販売いたします。この機会にぜひお求めください。

なお、『教育方法』最新刊(第43巻)は、本年度の学会費を納入された方には、受付の際にお渡しいたします。大会以降に学会費を納入された方には、随時お手元に郵送いたしております。

10月12日(日) 9:00~12:10

自由研究7

(教育学部 L102講義室)

司会者：白石陽一(熊本大学)
百々康治(志学館大学)

- 9:00 ① 近代教育方法史における学級共同体論の形成と展開
— K. G. Scheibert に光を当てる試み—
熊井将太(山口大学)
- 9:30 ② 戦後イタリアの民間教育研究に関する考察
— 雑誌“Scuola e Città”の検討を中心に—
徳永俊太(岐阜経済大学)
- 10:00 ③ 明治期における一斉教授法をめぐる論調
— 等級制から学級制への移行を中心に—
杉村美佳(上越大学短期大学部)
- 10:30 ④ 教育における是認性と非是認性
— ベンナー (Benner, D.) の『一般教育学』を参照して—
牛田伸一(創価大学)
- 11:00 ⑤ 「自由研究」の廃止過程の検証と木宮乾峰の「教育課程」
— 木宮乾峰における「教科課程」から「教育課程」への変化—
白尾裕志(琉球大学)
- 11:30 ⑥ 授業研究を「核」とする学校づくりに関する研究
— 島小写真記録の分析を通して—
狩野浩二(十文字学園女子大学)

自由研究8

(教育学部 L104講義室)

司会者：市川博(横浜国立大学名誉教授)
長尾彰夫(大阪教育大学)

- 9:00 ① 音楽科における教師の力量形成に関する研究
三小田美穂子(国士舘大学)
- 9:30 ② 小学校社会科教師の力量形成過程における一考察
— 一人の青年教師を事例として—
中島常彦(広島大学大学院)
- 10:00 ③ 日本小学校社会科書における言語学的研究(2)
— 小学校教科書コーパスの分析を通して—
深谷圭助(中部大学)
- 10:30 ④ 東広島市における和文化教育の経緯と意義
中村哲(関西学院大学)
- 11:00 ⑤ 小学校体育授業における初任教師の相互作用行動に関する事例研究
— 教材内容と子どもの複合的知識への介入の効果—
厚東芳樹(北海道大学)
- 11:30 ⑥ 授業記録の中間項による再構成とその可逆性に関する事例研究
的場正美(東海学園大学)

自由研究9

(教育学部 L107講義室)

司会者：小 泉 祥 一 (東 北 大 学)
藤 原 顕 (福 山 市 立 大 学)

- 9:00 ① ヴィゴツキーの科学的概念の発達論にみる外国語教育への示唆
ー母語と外国語の相互依存的発達に着目してー
佐々木 陽 子 (東 京 大 学 大 学 院)
- 9:30 ② 小学生の話し合い時における意識と能力との関連に関する基礎的研究
ー図画工作科5年生の工作に表す活動を通してー
磯 部 征 尊 (愛 知 教 育 大 学)
○伊 藤 大 輔 (金 沢 工 業 大 学)
- 10:00 ③ 発展的な読みの能力を保障する教育目標・評価論の課題
ー1960年代のアメリカにおける「読みの理解のタキソノミー」をめぐる議論の検討を通してー
八 田 幸 恵 (大 阪 教 育 大 学)
- 10:30 ④ 短期大学教職課程におけるアクティブ・ラーニングに関する実践研究
ー小学校の現場で活用されている言語活動の手法を用いてー
小 林 祐 一 (沖 縄 女 子 短 期 大 学)
- 11:00 ⑤ 紙と鉛筆で始める情報教育8年間の成果
ー教師の変容と生徒のコンピテンシーの向上ー
安 谷 元 伸 (滋 賀 大 学)
- 11:30 ⑥ 汎用的な力の育成と関わる学習活動の設計及び評価方法に関する研究
ーループリックの開発とテクノロジーを用いた評価と関わってー
小 柳 和 喜 雄 (奈 良 教 育 大 学)

自由研究10

(教育学部 L109講義室)

司会者：三 橋 謙 一 郎 (徳 島 文 理 大 学)
山 根 俊 喜 (鳥 取 大 学)

- 9:00 ① 量の連続的可変性に基づく測定単元の指導原理
中 島 淑 子 (名 古 屋 大 学 大 学 院)
- 9:30 ② 教育評価におけるステイクホルダーの参加
ーFetterman のエンパワメント評価を手がかりにー
北 川 剛 司 (奈 良 教 育 大 学)
- 10:00 ③ 「対話」にもとづく学びの研究
ー対話的関係を築く力を育成する算数科教材の開発の試みー
○二 宮 衆 一 (和 歌 山 大 学)
市 川 哲 哉 (和 歌 山 大 学 附 属 小 学 校)
- 10:30 ④ ループリックの学習促進機能
安 藤 輝 次 (関 西 大 学)
- 11:00 ⑤ オントロジーを援用した授業分析手法の提案
ー複雑な対立関係にある発言間の関連構造の解明ー
○丹 下 悠 史 (名 古 屋 大 学 大 学 院), ○水 野 正 朗 (名 古 屋 市 立 桜 台 高 等 学 校)
○田 中 眞 帆 (名 古 屋 大 学 大 学 院), ○柴 田 好 章 (名 古 屋 大 学)
胡 田 裕 教 (大 阪 大 学 敬 愛 高 等 学 校)

10月12日(日) 9:00~12:10

自由研究11

(教育学部 L202講義室)

司会者：鹿毛雅治(慶應義塾大学)

三石初雄(帝京大学)

- 9:00 ① 大きさの変化に着目した化学変化のモデル
渡邊大輔(東京都市大学)
- 9:30 ② エブリ(H. Aebli)の認知心理学に基づく教授学構想
吉田成章(広島大学)
- 10:00 ③ 教科の知識内容と実験・観察活動の關係に着目した理科教科書分析
ー理論的フレームワークと教科書比較事例の紹介ー
大野栄三(北海道大学)
- 10:30 ④ 21世紀型学習と授業デザイン
ーフィンランドの小学校における教室実践を事例にしてー
山住勝広(関西大学)
- 11:00 ⑤ 総合学習の現状調査を踏まえた授業構想と実践
ー簡易塩田方式による塩づくりから理科学習への知的移行ー
○梶原郁郎(愛媛大学)
○藤田義和(愛媛大学)

自由研究12

(教育学部 L204講義室)

司会者：藤江康彦(東京大学)

吉崎静夫(日本女子大学)

- 9:00 ① 子ども参加による学校づくりにおける四者協議会の展開(その2)
ー9年目を迎えた埼玉県志木市立志木第二中学校の事例研究ー
坂本徳雄(国士舘大学大学院)
- 9:30 ② 参加型研修『Round Study』の提案と効果の検証
ー教員研修のあり方についての新しい試みー
原田三朗(愛知県豊川市立一宮南部小学校)
- 10:00 ③ 園内研究協議会の工夫と困難に関する調査研究
○椋田善之(関西国際大学)
秋田喜代美(東京大学)
- 10:30 ④ 小学校授業研究協議会実施の工夫と困難に関する調査検討
○秋田喜代美(東京大学)
椋田善之(関西国際大学)
- 11:00 ⑤ 学校の組織開発における授業研究の位置
ー市町村教育委員会の指導行政調査を基にー
千々布敏弥(国立教育政策研究所)
- 11:30 ⑥ 専門的な学習共同体のネットワーク化の新展開
ー米国における Instructional Round の分析を通してー
○廣瀬真琴(鹿児島大学), ○宮橋小百合(四国学院大学)
○木原俊行(大阪教育大学), 森久佳(大阪市立大学)
深見俊崇(島根大学)

10月12日(日) 9:00~12:10

自由研究13

(教育学部 L206講義室)

司会者：住 野 好 久 (岡 山 大 学)
西 岡 けいこ (香 川 大 学)

- 9:00 ① フランス・パリ郊外ナンテールの教育困難校における幼児教育の実践
坂 本 明 美 (山 形 大 学)
- 9:30 ② フランスの幼小教育における教育的連続性の考察
ー初等学校プログラム(学習指導要領)の検討を通してー
赤 星 まゆみ (西 九 州 大 学)
- 10:00 ③ 教育行為に於ける「主体性」概念の転換について
伊 澤 修 二 (阜 月 幼 稚 園)
- 10:30 ④ 保育におけるコンピテンシー形成に関する検討
渡 邊 眞依子 (愛 知 県 立 大 学)
- 11:00 ⑤ 写真評価法(PEMQ)を用いた研修は保育者に何をもたらすのか
ー「保育環境」キーワードに関する事前・事後調査の質的分析ー
○中 坪 史 典 (広 島 大 学), 箕 輪 潤 子 (川村学園女子大学)
野 口 隆 子 (十文字学園女子大学), 上 田 敏 丈 (名古屋市立大学)
門 田 理 世 (西南学院大学), 鈴 木 正 敏 (兵庫教育大学)
芦 田 宏 (兵庫県立大学), 秋 田 喜代美 (東 京 大 学)
小 田 豊 (聖 徳 大 学)
- 11:30 ⑥ 現代学校教育システムの分業化の論理の克服は可能か
ー私立M幼稚園のフィールドワークを通してー
○小 川 博 久 (東京学芸大学名誉教授), ○岩 田 遵 子 (東京都市大学)
由 田 新 (千葉明德短期大学), 菊 池 里 映
田 甫 綾 野 (山 梨 大 学), 根 津 明 子 (東京都市大学)

10月12日(日) 13:15~15:15

課題研究Ⅳ

教育のグローバル化に教育方法学はどのように対応するか

(教育学部L205講義室)

コーディネーター

中野和光(美作大学)

西岡加名恵(京都大学)

司会者

西岡加名恵(京都大学)

深澤広明(広島大学)

提案者

松下佳代(京都大学) 大学教育のグローバル化と教育方法学

佐藤学(学習院大学) グローバル化時代の日本における学校改革の課題

中野和光(美作大学) 教育のグローバル化の中の教育方法学

〈設定趣旨〉

経済のグローバル化、インターネットの世界的普及とともに、教育のグローバル化が進んでいる。多くの国において、スタンダードとアカウンタビリティに基づき、リテラシー、数学、理科、外国語（特に英語）、ICT活用能力に焦点化したカリキュラム改革が行われている。日本においては、教育再生実行会議のもとで「戦後レジームからの脱却」をキーワードとした教育改革が進行している。その改革路線のもとで、高等教育においても、外国人教員の採用、英語による授業の拡大、といった人材・システムのグローバル化が進められようとしている。教育のグローバル化のこのような動きとその中における現代日本の教育改革をどのようにとらえたらよいのだろうか。教育方法学は、このことにどのように対応したらよいのだろうか。教育方法学研究の今後のあり方を展望する課題研究としたい。

課題研究Ⅴ

学校間接続を問い直す

(教育学部L102講義室)

コーディネーター・司会者

池野 範 男 (広島大学)

田代 高 章 (岩手大学)

提案者

安彦 忠彦 (神奈川大学) 学校間接続を規定する要因の一つとしての子供の発達状況

二宮 肇 美 (呉中央学園, 呉中央中学校) 呉中央学園の小中一貫教育の実際と小中一貫教育が拓く授業改善

樋口 直 宏 (筑波大学) 小中一貫教育におけるカリキュラム開発の現状と課題

〈設定趣旨〉

近年、6・3・3・4制という第二次大戦後の学校教育制度に対する問題のひとつとして、保・幼・小・中・高・大における学校段階間の連携・接続のあり方が問われている。社会の多様なニーズに合わせた柔軟な制度改革とともに、目標、内容、方法の見直し、新たな体系性、連続性の追究が進められている。

すでに、公立の中・高接続に関しては、連携型・併設型のほか、一貫教育校としての「中等教育学校」も制度化されており、中教審や安倍内閣の教育再生実行会議においても、保・幼・小・小・中・中・高・高・大の接続・連携のあり方が問われている。

特に、「小1プロブレム」、「中1ギャップ」などといわれる教育の現状に対し、6・3・3・4制の見直し、子どもの発達に即した教育課程の柔軟な編成のあり方、教職員間の連携や意識のあり方、学校園と家庭や地域社会との関係のあり方など、多様な問題が検討されているが、その是非をめぐっては議論もある。

本課題研究では、特に、義務教育段階における公立小中連携・一貫教育に焦点化することで、論点を明確にし、議論を活発化させたい。

課題研究Ⅵ

教師教育における教育方法学研究的課題

—〈実践知〉の解明と育成へのアプローチ—

(教育学部L104講義室)

コーディネーター・司会者

庄井良信(北海道教育大学)

山崎準二(学習院大学)

提案者

藤原 顕(福山市立大学) 実践知へのナラティブ・アプローチ

小柳 和喜雄(奈良教育大学) 実践知への組織論的アプローチ

〈設定趣旨〉

教師が、自らの実践の中で発揮し、同時に実践の中で自己形成し豊穰化させていく専門的力量としての〈実践知〉に、多くの実践的・研究的関心が寄せられてきている。それは、〈実践知〉が教師としての高度な専門性の中核に位置しているとの認識に基づいてのことであるが、同時に「暗黙知」としての性格を有するといわれる〈実践知〉をどのようなものとして描いていくべきなのかがいまだ未確定のままで、関心の興隆でもある。

このような状況の下で、現実の教育政策主導の教師教育改革課題の一つに「実践的指導力」育成があげられたために、上記〈実践知〉への関心は、短期間でもたらされる成果の明示化とそれを生み出すためのシステムティックな手法の定式化という事態をも引き起こしかねないものとなっている。

今回の課題研究部会では、教師の専門的力量に対する幾つかのアプローチに学びながら、〈実践知〉の解明と育成の問題に焦点を当てつつ、教師教育における教育方法学研究的課題を明らかにしていく第一歩を踏み出していきたい。

10月12日(日) 13:15~15:15

〔会員企画課題研究〕 課題研究Ⅶ

教科教育における思考力育成としての論理と感性の役割

(教育学部L204講義室)

コーディネーター・司会者

片上 宗二 (安田女子大学)

清村 百合子 (京都教育大学)

提案者

永田 忠道 (広島大学) 論理と感性の包摂による創造主義の社会科
— 共感的理解と科学的説明の越境 —

河野 順子 (熊本大学) 国語科教育における「論理」と「感性」
— 説明的文章の学習指導を中心に —

小島 律子 (大阪教育大学) 音楽科における思考力育成としての論理と感性の役割

〈設定趣旨〉

昨年の課題研究では、思考力育成における感性の働きに着目し、授業における思考と感性との関係について議論する場を設定した。感性は芸術教科としての音楽科だけでなく、記号や法則を扱う理科といった教科においても働くものであることが確認された。

そこで次の課題として、国語や社会などほかの教科においても、思考力育成にかかわって感性は機能しているのだろうか、また機能しているとすれば、感性と論理はどのように関連して機能しているのか、という問いが浮かび上がってきた。

そこで今回は、教科教育において、感性の働きのみに着目するのではなく、論理と感性両方の関係に注目したうえで、思考力育成としての論理と感性の役割について明らかにしたいと考えた。両者の関係については昨年の課題研究で十分議論しきれなかった点でもある。あらゆる教科の立場が集う方法学会だからこそ、諸教科を横断して、教科教育における論理と感性の役割について議論する場としたい。

ラウンドテーブル①

小中一貫教育の総合的研究

— カリキュラムと教育方法および児童生徒へのアンケート調査から —

(教育学部L102講義室)

企画者

梅原利夫(和光大学)

金馬国晴(横浜国立大学)

船橋一男(埼玉大学)

提案者

梅原利夫(和光大学)

金馬国晴(横浜国立大学)

船橋一男(埼玉大学)

都筑学(中央大学)

高坂康雅(和光大学)

〈設定趣旨〉

小中一貫教育については、①施設一体型学校(約100校)、②一貫カリキュラムを行う施設分離型学校、③小中が独立していて連携を行う学校、などの類型化ができる。その目的は、小学校と中学校との段差を低くしたり、小中で連続したカリキュラムの実施をめざしたり、いわゆる「中1ギャップ」の解消をねらう、などが強弱をつけてあげられている。またカリキュラムでは、現行の6・3制の区分に替わって、4・3・2制や5・4制などが試みられている。

私たちは、共同研究グループを結成して、これらの諸問題について研究を進めてきた。

今回の発表では、次の2点を中心に問題提起を行い、参加者の皆さんとの意見交換を行いたい。

第1には、①と②の事例の中から、カリキュラムと教育方法(教科指導および生活指導)の実践を具体的事例に即して分析し、結果や課題を考察する。

第2には、2013年度に行った児童・生徒へのアンケート調査(小学校50校・4,593人、中学校24校・4,204人、総計74校・8,797人)の結果について、その特徴を分析し考察する。

10月12日(日) 15:30~17:00

ラウンドテーブル②

演劇的知の教育方法的検討 (2)

— ドラマ的な手法を用いた古典教育 —

(教育学部L107講義室)

企画者

渡 部 淳 (日 本 大 学)

司会者

深 澤 広 明 (広 島 大 学)

提案者

中 野 貴 文 (東 京 女 子 大 学)

共同研究者

三 橋 謙一郎 (徳島文理大学), 武 田 富美子 (立 命 館 大 学)

青 木 幸 子 (昭和女子大学), 宮 崎 充 治 (桐 朋 小 学 校)

和 田 俊 彦 (跡見学園高校), 宮 原 順 寛 (北海道教育大学)

渡 辺 貴 裕 (東京学芸大学), 藤 井 洋 武 (日 本 大 学)

〈設定趣旨〉

第1期のラウンドテーブル「教育方法のトポロジー」では、「ドラマワーク」を主なキーワードとして、教育における演劇的手法の活用可能性を5年間にわたって検討した。

昨年度からはじまった第2期では、「演劇的知」をキーワードとした新たな研究に着手している。今回は、古典教育の変革と演劇的知の関係について検討する。

新学習指導要領によって「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設されたことにより、学校現場での古典指導の重要性が一層高まっている。その一方で、何をもって「伝統的な言語文化」と呼ぶのか、何をどのように教えることが古典継承といえるのかなどといった問題がなおざりにされたままである。加えて、中学高校では受験科目としての古典の重要性のみがクローズアップされ、結果的に古典嫌いの生徒を増やすという悪循環におちいつている。また、知識偏重・現代語訳偏重の授業では、古典の世界観への深い理解を促すことも難しいといわざるを得ない。

以上のような現状認識にたつて、徒然草など鎌倉期の文学を専門とする中野貴文氏から、ドラマ的な手法を用いて中高の古典教育をドラスティックに変革する方向を提案していただき、それをもとに討議を進めたい。

本ラウンドテーブルにこれまで参加したことのない会員のみなさまの参加も歓迎いたします。

ラウンドテーブル③

授業助言者としての指導主事の力量形成

(教育学部L109講義室)

企画者

秋田喜代美(東京大学)

報告者

木原俊行(大阪教育大学)

牧田秀昭(福井県教育研究所)

塩尻文男(東大阪市立八戸の里小学校)

コメンテーター

Catherine Lewis(ミルズ大学)

〈設定趣旨〉

学校での校内研修の質を自治体としてあげていく際に、学校訪問をする指導主事がどのような助言を授業研究で行っているのかは、各自治体の授業の向かう方向や質の向上を考えた際に、果たす役割は大きいと考えられる。そしてまた、指導主事という制度は、歴史的に日本が独自にもっているオリジナルな制度であると考えられる。あらたにレッスNSTAデイを始めた多くの国では、どのようにして授業研究の助言者を育成するのかは関心事の一つである。指導主事は、教師として授業研究を校内研修で体験はしてきていたとしても、そこにはあらたに指導主事としてどのような力量が求められるのだろうか、そしてその力量を形成するために、どのような学習過程が教師から指導主事へと変化することで生まれるのだろうか。実際に、授業助言者としての指導主事はどのようにして力量形成を行っているのだろうか。授業助言において教育委員会内でどのようにしてそれらが伝承され相互に学びあっていくことができるのか、指導主事の力量形成に対して、現在以上にさらに質をあげていくためにはどのような工夫がありえるのだろうか。また指導主事の授業助言と研究者や同僚からの授業への助言は何がどのように異なるのだろうか。

これらの問いに対して、本ラウンドテーブルでは、指導主事を過去に経験しておられると同時に、ご自身が指導主事の力量形成のための試みをフォーマル、インフォーマルに行ってきた2人の指導主事経験者と、指導主事の力量形成に関して実践研究を行っている研究者に具体的な事例をもとに話題提供をいただき、それは異なる文化背景を持つ米国のレッスNSTAデイ研究者からみて理論的にどのような意味や可能性をもつのかをコメントをもらいながら、フロアと共に議論をしていく予定である。授業研究を現在中核にすえて議論をしてきている教育方法学会だからこそ、指導主事に焦点を当てることで、校内研修支援体制とそのための専門的力量について新たな視点から考えていきたい。

10月12日(日) 15:30~17:00

ラウンドテーブル④

市民性教育の新たな実践研究のためのキックオフミーティング

(教育学部L202講義室)

企画者

桑 原 敏 典 (岡 山 大 学)

吉 村 功太郎 (宮 崎 大 学)

川 口 広 美 (滋 賀 大 学)

報告者

桑 原 敏 典 (岡 山 大 学)

吉 村 功太郎 (宮 崎 大 学)

報告及びコメント

岡 崎 久 弥 (森永ヒ素ミルク中毒事件資料館館長・虎頭要塞日本側研究センター代表)

〈設定趣旨〉

本ラウンドテーブルは、近年、各地で多様な取り組みが見られるようになった市民性教育（シティズンシップ教育）実践を研究するための新たな分析枠組みの構築を目指して企画したものである。従来の市民性教育は、教科で言えば社会科が主にその役割を担って実践されてきた。しかし、近年は、特定の教科の枠をこえた実践が多々見られるようになっただけではなく、学校という枠も越えて社会の中で、あるいは学校と社会の連携に基づいて取り組まれている。そのような市民性教育の多様性を反映し、日本シティズンシップ教育フォーラムのような組織も作られ、市民性教育に関して立場や領域を越えた議論が活発になされるようになってきている。各地でなされている市民性教育の取り組みについて活発な情報交換がなされ、実践が盛り上がっていくことは望ましいことではあるが、一方で、市民性教育実践をめぐる百花繚乱とでも言うべき状況を、学問的な立場から整理していく必要があるのではないか。教育の実践者と研究者が広く参加している日本教育方法学会は、このような多様性を特質とする市民性教育の現状を語り合う場としてまさに適していると考え、この度ラウンドテーブルを申し込ませていただいた。

企画者の三名は、これまで主に社会科教育研究の立場から、市民性教育研究に携わってきた。本ラウンドテーブルでは、まず、企画者が、市民性教育の新たな実践研究の方法を提示しながら、研究の枠組みを提案していく。そして、その枠組みの妥当性や有効性について様々な立場の方とともに議論を行っていききたい。もちろん、ラウンドテーブルに参加していただいた学会員の方からも多くの意見を募っていく。そのうえで、多様な市民性教育を捉える統一的な視点を見出したいと考えている。

10月12日(日) 15:30~17:00

ラウンドテーブル⑤

インクルーシブ授業の成立と構造を考える

(教育学部L108講義室)

企画者

新井英靖(茨城大学)

湯浅恭正(大阪市立大学)

提案者

今井理恵(日本福祉大学)

永田麻詠(梅光学院大学)

福田敦志(大阪教育大学)

〈設定趣旨〉

内外を問わず、インクルーシブ授業論の探求が今日の教育方法学研究の課題として取り上げられている。昨年はインクルーシブ授業方法を考える手がかりについて、国語科の授業実践を中心に議論し、・ユニバーサルデザイン等の授業観の検討、・学級論と共同体論の検討、・教科の構造と子どもの認識・表現の発達・授業展開における参加論と指導方法といった視点から、インクルーシブ授業方法の検討課題を析出した。発達障害のある子どもの教材へのアクセス、教科指導における認識と感性、話し合いへの参加の方法、旧来の授業に囚われている授業観の問い直しなどの論点が浮き彫りにされた。

その後、インクルーシブ授業論についての共同研究を通して、関連する学会等の研究動向を踏まえた文献リストを作成し、それに基づいた授業研究の視点を議論し、さらに授業研究を通してインクルーシブ授業が設立するための要件を検討してきた。後者については、国語科の授業実践の分析を進め、○前提になる条件は何か、○カリキュラムレベルの課題、○授業展開の方法技術、○教科の特性、学校文化や学級文化と授業の成立、○教師のライフヒストリーにおけるインクルーシブ授業の位置づけなどの要件を仮説として得ることができた。今回は、これらの結果を示しながら、インクルーシブ授業の成立と構造を議論し、さらなる研究視点を探りたいと考える。

10月12日(日) 15:30~17:00

ワークショップ①

授業映像記録にもとづく比較授業分析

— インドネシアの小学校における言語活動を促す授業過程を中心に —

(教育学部L204講義室)

企画者

柴田好章(名古屋大学)

提案者等

サルカールアラニ・モハメッドレザ(帝京大学)

久野弘幸(名古屋大学)

〈設定趣旨〉

本ワークショップでは、過去3年間の国際比較授業分析のワークショップの成果をもとにし、提案者らが協同して研究を進めている比較授業分析を行う。今回は、インドネシアの小学校の授業の映像記録にもとづいて、比較授業分析を行い、異なる国の授業の共通性や差異を明らかにする。これを通して、文化を越えて互いに有益な知見を見いだすことをめざしている。

ワークショップでは、まず、提案者側から、分析対象授業の紹介を行う。そして、ビデオを視聴し、参加者にも実際に比較授業分析を行ってもらい、意見交換をする。今回の授業分析では、言語活動を促す授業過程に着目する。

比較授業分析によって、国を超えて、授業あるいは学習という事象における共通する知見や課題が明らかになると予想される。また、両国の教育の制度や文化背景を考慮しつつ比較文化論的に考察することによって、授業の有する文化的固有性や共通性についても明らかになると予想される。さらに、文化複合の観点から提案者らが行っている最新の研究成果の一部も提案する。参加者も交えてディスカッションを行い、授業という複雑な事象に対する研究アプローチのあり方を考えた

10月12日(日) 15:30~17:00

ワークショップ②

各教科における辞書を活用した効果的な言語活動への取り組み

(教育学部L206講義室)

企画者

深谷圭助(中部大学)

報告書

古野美香(帝京大学小学校)

木幡延彦(ベネッセコーポレーション)

提案者

Edmund Lim (Huamin Primary School, Singapore)

〈設定趣旨〉

平成20年改訂学習指導要領において、各教科における言語活動の充実が改訂の柱となった。

各教科における言語活動については、言語による表現活動に重きが置かれている。その一方で、各教科における内容理解を、「言語」を通して行うことを鑑みれば、各教科で用いられる教科語彙について十分理解できているかを確かめることは重要であり、国語辞典で語彙を調べ、理解を深めることは大切なことである。

小学生向けの国語辞典は、小学校各教科の学習に対応しており、それぞれの教科学習の文脈で語彙について理解が図られるように編集されている。したがって、各教科において扱われる教科語彙を理解させ、適切に使用させることは極めて重要である。そのためには様々な場面において辞書を活用する習慣を身につけさせることが求められる。

国語辞典等を様々な学習場面において、主体的に活用する習慣を育てることは、児童の学ぶ意欲を高めることにつながる。ところが、辞典指導は、小学校国語科の3・4年生の内容に定められているが、辞書を引くことを習慣にするまで至っていないのが現状である。

本ワークショップでは、「各教科における辞書を活用した効果的な言語活動への取り組み」をテーマとし、学習活動のさまざまな局面において辞書を活用した帝京大学小学校における実践事例を発表する。また、ベネッセコーポレーション辞典企画課より、辞書を活用した言語活動の充実に関する全国各地の公立小学校での活用事例を紹介すると共に、辞書を活用した実践により、具体的にどのようなエビデンスが確認されたかを発表する。

さらに、ラウンドテーブル・ワークショップ参加者に対して、具体的な辞書を活用した指導法の体験も予定している。

なお、このアプローチはすでに、シンガポール、イギリスにおいてその効果について検証活動が始められている。Self-directed learning, Promote Academic Competence, Independent Learning というキーワードで、辞典を活用した言語活動の取り組みが行われている。

日本教育方法学会刊行書籍

教育方法13.	いま授業で何が問われているか	1983	(2,472円)
教育方法14.	子どもの人間的自立と授業実践	1985	(2,940円)
教育方法16.	個性の開発と教師の力量	1987	(2,520円)
教育方法17.	教育方法を問い直す	1988	(3,045円)
教育方法18.	新教育課程と人間的感性の育成	1989	(2,039円)
教育方法19.	知育・徳育の構想と生活科の指導	1990	(1,794円)
教育方法20.	学校文化の創造と教育技術の課題	1991	(1,794円)
教育方法22.	いま、授業成立の原則を問う	1993	(1,896円)
教育方法23.	新しい学力観と教育実践	1994	(1,896円)
教育方法25.	戦後50年、いま学校を問い直す	1996	(1,998円)
教育方法26.	新しい学校像と教育改革	1997	(1,890円)
教育方法27.	新しい学校・学級づくりと授業改革	1998	(2,058円)
教育方法28.	教育課程・方法の改革		
	一新学習指導要領の教育方法学的検討一	1999	(1,953円)
			(価格は税込)

〒114-0023

東京都北区滝野川7-46-1

明治図書

TEL(編)03-5907-6620

TEL(営)048-256-2337

【教育方法】は、大会当日、会場にて大会割引価格にて販売いたします。
この機会に多数の方々のご購入をお願いいたします。
【教育方法29】より、図書文化から出版されることになりました。

教育方法29.	総合的学習と教科の基礎・基本	2000	(1,890円)
教育方法30.	学力観の再検討と授業改革	2001	(1,890円)
教育方法31.	子ども参加の学校と授業改革	2002	(1,995円)
教育方法32.	新しい学びと知の創造	2003	(1,995円)
教育方法33.	確かな学力と指導法の探求	2004	(1,995円)
教育方法34.	現代的教育課程改革と授業論の探求	2005	(1,995円)
教育方法35.	学習意欲を高める授業		
	一どのような学力を形成するか一	2006	(2,100円)
教育方法36.	リテラシーと授業改善		
	一PISAを契機とした現代リテラシー教育の探究一	2007	(2,100円)
教育方法37.	現代カリキュラム研究と教育方法学		
	一新学習指導要領・PISA型学力を問う一	2008	(2,100円)
教育方法38.	言語の力を育てる教育方法	2009	(2,100円)
教育方法39.	子どもの生活現実にとりくむ教育方法	2010	(2,100円)
教育方法40.	デジタルメディア時代の教育方法	2011	(2,100円)
教育方法41.	東日本大震災からの復興と教育方法：防災教育と原発問題	2012	(2,100円)
教育方法42.	教師の専門的力と教育実践の課題	2013	(2,100円)
			(価格は税込)

最新刊・教育方法43.

授業研究と校内研修 ― 教師の成長と学校づくりのために ―

〈内 容〉

- I 授業研究と教師の成長
- II 授業研究と学校づくり
- III 教育方法学の研究動向
- IV 日本教育方法学会創立50周年に寄せて

〒112-0012

東京都文京区大塚1-4-5

図書文化

TEL. 03-3943-2516